

---

# M o o n & S a n

沙麻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Moon&San

### 【Nコード】

N2641F

### 【作者名】

沙麻

### 【あらすじ】

幼い頃から、あることがキツカケで人と関わるのが苦手になつてしまった深月<sup>みつき</sup>。そんな日常を送っていたある日、陽<sup>よう</sup>という男の子に出会い…？！

## プロローグ

鳥が空を慕うように…

魚が海を乞うように…

私は誰かを恋するのだろうか

…それは

『運命』

と云う名の類のものだろうか……

—…私には分からない

## 第一章【Remembrance・記憶】

ジャー——…

カチャカチャ——…

「ねえねえママ!!」

5才くらいの少女が、皿洗いをしていたらしい母親のスカートの裾をクイツと引つ張った。

「なあに？深月」

流れる水を止め母親はエプロンで手を拭き、ふわつと優しい微笑みを浮かべ少女—深月の目線に合わせるようにしゃがんだ。  
深月は照れたような表情をしながら

「あのねみいねママとパパとみいの絵を描いたんだよ!!」

…と、にこつと笑い持っていた絵を

「じゃーんっ!!」という効果音と共に表に出した。

一枚の画用紙には…男と女を描いてありその二人の間には少し小さな女の子の姿があった。父、母そして深月を表しているのだろう。どこか心温まる絵だった。

「パパとママとみいなんだよ」

「まあ上手だわ」

エヘへと笑う深月の頭を撫でながらどこか嬉しそうな笑みを浮かべ言った。

「パパにも見せてくれないかい？」

リビングでソファーに座って本を読んでいた父が、かけていた眼鏡を人差し指でくいと押し上げながら深月と母に近寄ってきた。

「うん！いいよ」

深月が持っていた絵を覗き込むと…

「おおーこれは上手すぎる！深月は将来有名な画家になれるぞ？！」

わははと豪快な笑い声を上げながら言う。

「本当？！みたい頑張るね」

ガッツポーズをしながら言う深月に母と父は一瞬顔を見合わせたが「頑張つて」とニコツと笑い深月の頭をくしゃつと撫でる。

ジリリリリリ———……

いきなり鳴り響いた一つの騒音で暖かく…微笑ましい场景が、幻を見せた霧かのようにサァと消え去った。

「…音の正体は目覚ましだった。

シンプルに飾られた部屋に、朝の目覚めを告げる為に高らかに鳴り響く。

「…嫌な夢見た…」

いつからに流れているのだろう…目尻から流れる涙を拭い、まだ鳴り続けている音を少し乱暴に叩き止め一人の少女がムクリとベッドから起き上がる。

まみやみつき  
少女―真宮深月は少し青ざめた顔つきをしていた。あんなに微笑ましい夢を見たというのに…

深月がベッドの上で暫くの間片手で顔を覆って俯いていると…

――コンコン…

遠慮気味にドアをノックする音が聞こえた。

その相手は分かっているのだろう

「……………何？ちい姉さん」

何故か深月はうんざりとしたような表情を浮かべ応えた。

その声を合図にか…『ちい姉さん』と呼ばれた人物はパンツとドアが壊れんばかりの勢いで開け放ち部屋に入って…と言うよりは深月

自身に突進してきた。

「げっ…」

「おっはよーみいちゃん！」

そう言いながら深月に抱き付いた。

「おい…離せ」

ぎゅーっと抱き締められている深月は次第に怒りを、いや思い切り拒否の空気を醸し出し始めていた。ちい姉さん一悶宮茅はその空気を読み取ったのか、ぱっと体を離れた。

「やだなあーそんなに怒らないでよ。スキンシップじゃない」

あくまでも反省の色はどこにも見られず、にこにこ笑っている。

「スキンシップだあ…？こっちはちい姉さんのせいで毎朝首を痛めてんだけど？」

「まあまあ…落ち着い…」

「落ち着いてられるかこのバカ！…反省しろよ…ったく」

「深月！！」

「はい?!」

いきなり自分の名前を呼ばれた深月は思わず返事をしてしまった。

「あんだ…男の子だっけ?!」

「は？女だけど…?」

「その言葉遣いは何?!」

「何って？何？」

「…っ!!このひねくれ少女め」

「ふっ…ひねくれ少女ってなに？頭おかしくなっちゃった？」

明らかに見下したような発言に茅は徐々にムキになってくる。まあ…それがおもしろくてワザとしているのだが…

「もういいわよ!!ご飯抜きだからね!？」

「別にいいし」

何を言っても応えない深月に対して茅は若干悔しそうな…しんみりした表情を浮かべた。

「嘘だよー一緒に食べよう？1人じゃさすがに寂しいよ…」

そんな茅は駄々っ子のように腕をぐいぐいと引っ張る。

「…何歳だよあんたは」



「18歳だよ?」

「はいはい…:どうでもいいよほら早く準備してろ?」

適当にあしらい促した。

「了解しました深月隊長!!」

にこつと一つ笑いビシッと敬礼をして部屋を後にした。

「何のノリだよ…:ていうかあんた25歳だろーが。さば読みやがって」

茅がいなくなった部屋でボソッと呟き、深月は学校に行く準備を始めた。

# 第一章【Remembrance-記憶-】2

制服に着替えると鏡の前でリボンなどを整え、机の上に置いてあった鞆を掴み取り部屋を後にした。

トントンと階段を下りていくとフワッといい香りが漂ってきた。

「あつみいちやん早かったね。」

深月の足音に気がついたのかキツチンにいた茅がこちらに視線を向けた。

「そうか？ふつうだろ…今日の朝飯は何だ？」

「……深月？言葉」

深月のあまりの口の利き方に茅は眉間にしわを寄せる。

「はいはい。…朝ご飯は何でしょう？ お姉さま」

「もう……今日は目玉焼きとウィンナーですよ。あとパンとご飯と  
つちがいい?」

「飯：じゃなくてご飯で」

キツと睨まれて言い直した。

「えー？普通パンじゃない？」

じゃあ聞くんじゃないやねーよと心の中で悪態を突きつつ

「だろうね」と適当に気のない返事をした。

「ほら、座って座って!!」

テーブルの上にコト…コトと並べられていく二人分の食事。

深月是一个の椅子に鞆を置きそのいすの隣に腰掛け、茅は深月の前に座った。

二人は黙々と食べ続けていた。会話一つしないものの重い空気という訳ではない。毎朝二人の間に流れる穏やかな空気だ。

「ねえ…みいちゃん」

…だが珍しく真面目な表情で茅が空気を割り話しかける。

「？」

口の中にパンを詰め込んでいる状態なので声が出せず、首を傾げてそれに応える。

「みいちゃんて友達いる？」

いきなりの質問で驚いたのかパチパチっと瞬きをしたが、それは一瞬のこと…ごくんと口の中のパンを飲み込みすぐ元の表情に戻り

「…いない」

と言った。

『いる・いない』の答えではなく深月は『いない』と言う。

「みいちゃん…」

「心配すんなよ。別に普通に過ごしてるし」

悲しげな表情を浮かべた茅に気づきにつと笑って言った。

「うん…いやでもねー…」

ホツとした表情をしたかと思えばまた何かを思い出したかのようにまた浮かない表情をする。

「え、何だよ？」

安心したり憂いたり…忙しい奴だなあめんどくせーと思いつつためらいがちな語尾が気になった。

「それ」

「は？」

「みいちゃん…口悪いでしょ？多分少なからず敵を作ってると思うんだけど」

そう…深月はめったに笑わない無愛想で口調が男っぽいだけあって少しでも語尾を上げたりすると機嫌が悪いようにみられることがあ

る。ほぼ無自覚の毒舌だったりもする。

「あ……」

いくつか思いつく点があるのだが……

「ほら、やっぱりね！」

何故か得意気に言う茅。

「何だそれ……大丈夫だって」

「本当に……？」

「疑り深いな」

「だってなかなか本心言ってくれないじゃない。周りの人にも少しずつ自分をさらけ出さないと！」

そのとき深月の眉がぴくりと動いた。これは何かを拒否する前に起きる前触れを意味する深月のクセだ。

そんなクセを知っている茅はヤバイ……地雷踏んだ……と焦り慌てて謝る。

「あーごめん冗談だよ？」

「……」

「……」

長い沈黙が流れ始めた。…が

————ピーンポーン

客が来たことを告げる音が鳴った。

深月はバツと時計を見て

「…多分美桜だ」

そう言いながら立ち上がり隣に置いてあった鞆を肩に掛けながら玄関に向かった。

「え？友達？」

茅は慌てて深月の後を追いつつ尋ねた。

「いや、あっちが絡んでくるだけ…」

よく分かんないと言うような口調で呟いた。

「そうなんだ…でも学校一緒に行く時点で結構仲がいいってことじゃないの？」

「……？仲がいいって何？」

「え？」

「いや何でもない。行ってきます」

深月の呟きに呆然としている茅にそう言って家を後にした。

「え?! あ、うん行ってらっしゃいっ」

慌てて深月の背に手を振りながらそう投げかけた。

――パタン

「あの子――まだ――」

家に一人残された茅はぼつりと言葉をこぼした。

## 第一章【Remembrance・記憶】3

家を出ると、にっこり微笑んでいる少女――平瀬美桜ひらせみおが立っていた。

「おはよう深月ちゃん」

そういった美桜を一瞥だけをくれて横を通り抜けた。

「ちょっと無視しないでよっ!!」

「……………」

…

……

…テクテク…テクテク…

スタスタ…スタスタ

ピタッ…ピタッ



「何なんだよ…ついて来んじゃねーよ！！ストーカーかデメエは」

クルツと回り後ろから深月とある程度距離を置いてついて来ていた美桜に向き直る。

「みいちゃんのばかーっ」

ジトーつと深月を見据えるといきなり叫んだ。

「誰がみいちゃんだ！！」

「一緒に学校行こうねって約束したでしょ？！」

深月のツッコミをシカトして涙ながらに深月の手を握り、言う。

「話聞けよ！！ていうか…そんな約束した覚えねーよ」

変な嘘芝居すんな気持ち悪いなどと、呟きながら手を引き離れた。

「相変わらず深月ちゃんは言葉遣い悪いねえ」

しみじみと美桜は呟いた。

「うつさいな……なに笑ってんだよ、何か可笑しいのか？」

鬱陶しそくに顔をしかめるが、美桜の表情を見て怪訝そうな表情に変わった。

決していい言葉を浴びせられた訳ではないのに、美桜は笑っていた。

「深月ちゃんの怒った顔面白いんだもん……」

クスクスッと楽しそうに笑う。

「お前はガキかよ……」

「……………」

そんな美桜を無視して足を進めた。

「あつ！！深月ちゃん待ってよ」

置いて行かれていることに気付いた美桜は走って深月の後を追った。

## 第二章「escape - 逃げ -」（前書き）

私の小説を読んで下さっている方に 更新の方遅くなってしまう申し訳ございませんでした。

## 第二章【escape・逃げ】

——キーンコンカーンコン……

予鈴が鳴った。いつもなら余裕に席に座っているはずなのに、途中美桜に足止めをくらってしまったため、ギリギリになってしまった。

（ちくしょう……あいつのせいで……ていうか相変わらず川瀬は鬱陶しいんだよ。あいつが絡んできたのは……いつからだっけな？覚えてねーし。

だいたいいきなりなんなんだ？中学も一緒だったが今ほどあんなにしつこくくつついてくることはなかった……はずだ。

高校に上がってすぐくらいか？）

遅刻寸前なのにもかかわらず自問自答を頭の中で繰り返しながらトボトボ歩いていると、いつの間にか教室の前に着いていた。

（やめやめ。考えるのも怠くなってきた）

教室前は予鈴が鳴ったというのに内から人の話し声や笑い声が聞こえる。この雰囲気の中に割ってはいるのは少し気が引けたが、そうも言ってられない。

——ガラガラ

深月が教室の戸を引くと案の定教室内が一瞬しんとした。担任が来たのかと反応したのだろう。だがそれは一瞬のことでまた騒がしくなる。

（そんなに反応するのなら予鈴前には席に着いてるよ。でも、あんなに一斉に黙るなんてある意味団結してんじゃない？）

などと下らないことを心の中で呟き、カタンと椅子を鳴らし席に着いた。

何もする事がないのか深月は机に突っ伏した。朝は当たり前のごとく茅が突っ込んでくるために、体力を消費してしまう……

本当あの人は困る…今度突っ込んでくるときナイフでも用意しとこうか

などと恐ろしいことを考えていると、

「おい席に着けー」と気の入らない声で、席に着くことを促しながら頭がややバーコード禿っばくなっている担任が入ってきた。

「おせーよ、ハゲ」

失礼極まりないことを呟いた。

するとその呟きが本人に聞こえたのだろうか、チラリと深月の方を見た。

（…え。聞こえてたか？…んなわけないよな、あそこから一番遠いし）

深月の席は窓際が一番後ろときていて一番教卓から遠い。もし聞こえたとしたのなら相当な地獄耳だ。

いや、ハゲという言葉には過敏になっているのだろう。

「可哀相に…」

そう心の中で呟いた。

はずなのだが、声にでていたのだろうか…

「ブフッ」

「クスッ」

二つの噴き出した声が前と隣から聞こえた。

「は？」

「「あっははは一つ」」

「え?!」

先程噴き出した2人が盛大に笑い始めた。

突然のことに深月は目を丸くしたまま固まった。クラス全体も何があったのかとこちらに注目している。

「みいちゃんおっかしいーあははっ」

そう笑いを堪えながらも、結局は笑っている前の席の、美桜。

「ククッーあっははは」

何かつぼにはまったのか、まだ笑い続けている隣の席の……人。

「「アンタ最高っ」」

2人が声を揃えて深月を指差しながら言った。

「何が可笑しい？…そして人を指差すな」

怪訝そうに顔を歪ませながら2人の指をググツと思い切り反対側に押し曲げてやった。

「いゝででででっ」

見事にハモリながら痛がる2人を前に、思い切り不機嫌を露わにした表情で二人をにらむ。

「「怒らないで（よー）」」

涙目の2人が上目遣いで深月を見る。

「可愛くない」

ぱつさりと言い切り2人の指を解放する。

「お前ら一ツうるさいぞ!!」

「はい」

「へーい」

「……」

それぞれ返事（?!）をしながら前を向いた。

## 第二章【escape・逃げ】2

今月の予定を伝えるだけで担任は教室から出て行った。

（あーさっきのはやばかったな…声に出てたなんて）

深月は軽くうなだれる。机に突っ伏していると

「え……ねえ!!」

誰かに呼び掛けられていることに気付いた深月は、ちらつと顔を浮かして自分呼んでいる人物を見た。

「ねえ!! みいちゃん」

…美桜だ。

心底うんざりしたような、鬱陶しいと言うような表情をした。

「……」

そんな顔だけを見せて再び突っ伏す。

みいちゃんって何だよ、などと言おうとしたがどうせ美桜のペースに引きずられるためやめた方が賢明だと思いシカトすることに決めた。

「うわっ! ひどっ!! なにその反応…っておーいシカトしないでよ」



うるさいなと思いつつも反応一つ返さない。

「みいちゃんーみいーちゃーんー」

イラッ

いい加減腹が立ってきた。意味が分かんないニツクネームを連呼するんだよ。

「みついつちゃあん」

という美桜はわざわざ深月の耳元で騒ぎ始めた。手でメガホンを作り、みいちゃんと騒ぎ立てる。

「つるっさい!!」

バシッ

「ぶっ!」

美桜の顔面を掌で押しのける。

「ていうか”みいちゃん”て何なわけ?」

少し赤くなった鼻をさすりながら美桜は平然と深月を指差しながら言った。

「え?みいちゃんはみいちゃんでしょ?」

「…………指差すなっつってんだろぅがよ!!」

ググツと人差し指を思い切りあり得ない方向に反らす。

「いゝっだっーいゝ」

体裁を食らわせられた美桜は半泣き面で深月を睨む。全く怖くないが。

「友達にこんな事したらだめでしょ!？」

もう…目眩がする。

「誰が誰の友達だって言うんだよ!?!」

「みいちゃんはあたしの友達っ!?!」

さっきまで泣きそうに顔を歪ませていたが、がらっと変わりにこつと満面の笑みで答える。

その答えと笑顔を受けた瞬間…

(…お前が死ねばよかったのに!?!)

(お前なんか…知らない)

大人の男が、小さな少女を蹴りつけ、殴りつけながら罵倒の言葉を浴びせている場面が…深月の頭を過ぎった。

「っ…!?!」

その時深月は激しい吐き気に襲われ、ガタガタと机や椅子に当たりながらその場にしゃがみこんだ。

## 第二章「escape - 逃げ」2（後書き）

誤字などがありましたらお知らせください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2641f/>

---

Moon & San

2011年1月8日22時04分発行